

2月10日(木)
自己決定に基づく自由と決定論に基づく自由

作成者: 想田瑞恵

檜垣先生(以下H):土浦無差別殺傷事件、金川被告の手紙には考えさせられました。彼を説得することは極めて困難でしょうね。彼の主張のポイントはどこにあると思いましたか。

想田(以下S):人が「裁く」ことができるのは同じ概念を共有している人のみ、ということだと思います。彼にとっては理性も道徳法則も単なる想定に過ぎず、同意した覚えはないということなのでしょう。ただ哲学は「彼を裁けない」と言うてはいけないのではないかと考えています。けれど、裁判官の判決文を読んだ限りでは、裁判官の方向はどこかおかしい気がしました。

H:おかしかったですね。金川被告と話がかみ合っていなかったと思います。相手が仮にも言論で来ているにも関わらず「排除」という方向で応えるのは、少なくとも言論においては相手に負けを認めたことになります。

S:「先に相手が殺人をしたんだから」という理屈も、一応は考えられますが。

H:それでも力に力で応えては、やはり言論では負けたことになります。

栗原さん(以下K):今問題になっている「裁く」というのは、どのレベルの話ですか？道徳的な話でしょうか、それとも社会的な罰の話でしょうか。

H:どちらでもかまわないでしょう。要は相手に「自分は悪いことをした」と納得させることができるかということです。相手が社会というものを認めない限り、難しいという気がしています。こちらの考えは、相手から反論を受けるものではないかもしれませんが、正当性を主張する根拠を持つものでもないということでしょう。

K:なぜ彼を裁けないのかということについて、もう少し説明してもらってもいいですか。

S:金川被告の中では「社会も法律も単なる妄想である」ということが前提になっていると思います。そして「人が裁けるのは同じ概念や価値観を共有する人だけ」と主張し、自分はそうしたものを共有していない「ライオン」であるから、自分を裁くことはできないという論の展開になっていると考えます。彼が多少偽悪的になっているにしても、この論の展開自体にはかなりの説得力があるのではないかと気がします。

H:マイケル・サンデルも似たようなことを言っていますね。つまり、何らかの目的を共有していないと、どちらが正しいとも言えないということです。そして金川被告は、そういう共有できる目的など一切ないと主張しているわけですから、やはり説得するのは難しいでしょうね。そういえば、角田光代さんの『八日目の蟬』を読んだのですが、大澤さんの言うようなことを角田さんは本当に意図していたのか、かなり疑問に思いました。角田さん自身は物語的自己としてつないでいるような印象を受けましたね。大澤さんと角田さんの対談で、角田さんは大澤さんの言っていることを否定してはいませんが、ほとんどしゃべっていませんでしたね。

石田さん(以下I):対談なのに、という感じでしたね。

H:反対に、大澤さんと宮台真司の対談は、大澤さんがほとんどしゃべっていませんでしたしね。それと、前回の石田さんの問題提起には答えるべきだろうと思っています。どうでしょうか。今回のみなさんのまとめは、それぞれ特色が出ていてどれも面白かったですから、順番に見ていきますか。まずは栗原さんのですね。

S:栗原さんは、「自分で選択したことによりのみ責任が問われうる」ということを問題にしていますよね。前回、檜垣先生は「自分で選択していないことに対して、責任を引き受けることが大人になるということ」という言い方をしていたと思います。栗原さんは、この先生の考えに反対しているということになるのでしょうか。

K:そうですね。常に「ひきうけるか、ひきうけないか」という選択肢はあり、その選択をしているのは自分だと思っています。たとえ与えられたものであって自分の意志とは無関係なことであっても、それを受け入れるか受け入れないかという選択をすることはできるため、自分に責任があるという考えです。

S:「与えられたものであって自分の意志とは無関係なこと」を引き受けるということについて確認させてください。例えば、満員電車の中で故意ではなく偶然、相手の足を踏んでしまったとします。この行為自体は因果的に生じたことであって、自分の意志とは無関係です。けれどこの場合でも「すみません」と謝るのが普通だと思いますし、謝るのが「大人」ではないでしょうか。これは、故意ではないにしろ他人に不快な思いをさせたという理由で謝罪しているわけです。つまり、自分に責任があるからというより、自分の行為が他者にどのような意味づけがされるのかということを考えて謝っているように思います。この場合の謝罪も、栗原さんが言うような「自分の意志とは無関係なことを引き受ける」という状態なのでしょうか。

H:想田さんの言いたいことはいまいちわからなかったのですが、栗原さんの問題設定にずれている部分はある気がしましたね。与えられた顔そのものは選択できないことには変わりはないでしょ。「与えられた顔」のような選択できなかったものを受け入れるかどうかの選択は、別の次元の話だということはいいいですか。

K:確かにそうですね。

H:そうすると、栗原さんの考えを突き詰めると、「生きる」という選択をしない限り、生きていく責任もないことになります。「電車で足を踏む」という例で言うなら、足を踏んだこと自体にやはり責任はありません。それを栗原さんは「踏んだことを受け入れるかどうか」という問題にずらして考えているということになります。栗原さんの考えには社会という前提があるということですね。足を故意でなく踏んで謝るということは、「自分は社会の一員でありその中で良好な関係を築こうとすべきである」という前提があつてのものです。金川被告だったら「そうした緩やかな社会を作ることに同意した覚えはないし、社会の一員となることは責任ではない」と言うでしょうね。究極の自己決定が「社会的に生きること」だとするなら、社会に入るかどうかは自由ということになります。そして金川被告は「社会に入らない」という選択をしたことになりますね。

S:金川被告を説得するためには、「社会に入る」ことは人間なら当然のことで、選択の問題ではないのだと示せばいいということですか？

K:社会に入ることは自由にしておかないと、少なくとも僕の論は成立しなくなってしまうですね。

H:そうですね。確かに、息をしているだけで他人に影響を与えていると言うこともできます。けれどそれもホップズ的に弱肉強食の論理で説明できますね。社会を作ることに同意しないと、自己決定でやるという解釈もできなくなってしまう。それと、栗原さんの論にはもう一つ大きな問題がありますね。「なぜ栗原さんは社会で生きることを選択したのか」ということです。その選択の根拠はなんだったのでしょうか。最近の若者は社会で生きるという選択を避けていると考えることもできますし、根拠は自明のものではないのかもしれませんが。

K:確かにそれは問題だと思いました。

H:想田さんのまとめは「体験をダシにはしないが引きずる」という中島さんの言い方は、何らかの自己を想定してのものだろう。その自己とは尊厳を備えたものでなければいけない、ということですね。これは、今までの想田さんの主張を、中島さんの表現を使って言い換えた、ということでもいいですか？

S:はい。

H:次は石田さんの問題提起ですね。自明な共同体ができれば大丈夫というのはそうだろう、と同意した上で、そうした共同体を作ることは難しいとしていますね。石田さん、そのあたりをもう一度説明してください。

I:家族など選べないものに対して自己決定や自己責任が生じるという話はわかりますし、何らかの共同体は作れるかもしれませんが、ですが、それはあくまで「ような」であつて、「そういう共同体もありだよ」くらいの認識しかもたらさないでしょう。今は共同体のあり方自体が変わり、共同体から「自由に抜ける」ことが可能になっています。つまり共同体が選択可能になったということです。そのため昔と違い自己の基盤になるようなものにはならないと思います。

S:今まで石田さんは、どちらかというサンデル寄りな主張をしてきたと思うのですが、自己責任を

基盤にするのなら、方向性が違うのではないかという気がするのですか。

I:確かにコミュニタリアンとは方向性は違うと思います。ただ、サンデルは本当にコミュニタリアンなのかという疑問があるので。

H:サンデルは「共同体に無批判に従え」ということは言っていないですね。これは「共同体の伝統を引き受ける」という考えをしているのではという気がします。それから増田さんの考えですね。これは石田さんの問題提示に、ある意味応える形になっていると思います。自己決定や自由の考えから批判されてきた決定論ですが、形而上学的に考えれば決定論にも自由はあるだろう、という主張です。このときの自由とは「そうしないこともできる自由」ではありません。ただ、かつては共同体の拘束性を受け入れることで自己決定をしてきました。今はそうした共同体を構築することはできないでしょうが、決定論を受け入れることで自己決定をするということですね。神山さんも、拘束による責任と自己決定による責任を区別したうえで、前者こそが本当の自由だとしています。自己決定だと必ず条件付きの選択になってしまうから、本当の意味での自由にはなれないということですね。それでいいですか？

神山さん:そういうことになると思います。

H:言い方は悪いですが、栗原さんの「何でも自己決定」という考えを批判する形になっていますね。栗原さん、どう応えますか。

K:まず神山さんの考えを確認させてください。自分で選んだということは、必ず選んだ条件があるということになるため、自由ではない、ということですね？

H:なるほど。そうまとめても良いでしょうね。

神山さん:そうですね。

K:ううん。少し考えさせてください。

H:では石田さんは、増田さんの答えをどう考えましたか。つまり、擬似的な共同体であっても自己の基盤になれるのではということですね。自分に降りかかるものを全て受け入れれば、もう一度自由になれるのではという考えです。少なくとも運命はあるでしょう。人生が全て自分の思い通りには行っていないわけですから。

I:そうですね。誰もが自分の望むような出世コースに乗れるわけではありませんし。

H:増田さんの考えは、何かとても不幸なことが起こった人のものかもしれません。ジャンセニストの考えとも近いかもしれません。共同体の拘束を運命のようなものとする、形而上学的なレベルからは、むしろ自由ではないかということですね。自分の人生であっても自分で選べることはごくわずかでしょ。自分で選んだ授業であっても「思っていたのと違う」ということはあるでしょうし。

K:決定論だと、自分で選べるものは何もないのではないですか？自由からの責任ということは必要だと思いますし、決定論だと道徳的な善悪は全てなくなってしまうと思うのですが。

増田さん(以下M):栗原さんの考えは、外から決定論をみればそう言えるとは思いますが、視点が違うという気がします。

H:そうですね。「こうしたことができたから」や「自分が選択したから」という意味では、責任はないということは認めてもいいんじゃないですか？ただし責任である以上「自分が引き受ける」ということは必ず出てきます。「自分に起こったことを受け入れる」と「自己決定的に引き受ける」という二つの状態があるわけですね。どちらも必要という気がします。引き受けることはある種の選択であり、そこには責任があります。他ならぬこの私が引き受けているわけですから。そして、選択できなくても引き受けるということ、むしろ選択できなかったほうが受け入れやすいでしょうが、この選択はレベルの違うところにある気がします。

K:混乱しているので確認させてください。「決定論を引き受ける」というのは意味的におかしくはないですか？決定論の立場なら、「決定論を引き受ける」ということもすでに決まっていたことになるわけですから。

H:外から見ればそういうことになるでしょうね。

M:栗原さんの指摘をまだよく理解できていないのですが、人間には不可能な視点から運命をとら

えていませんか？栗原さんの疑問はどういうことなのでしょう？

H: 選択できないことが運命だとしているのに、なぜ引き受けるということは言えるのかということでしょう。ルターにしてもスピノザにしても、「決まっているかどうか」というレベルで自由を考えてはいなかった気がしますね。「引き受ける」と言った時点で、どうも違う視点から言っているようです。「決定されている・されていない」とはレベルの違う価値が切り開かれている気がします。スピノザは人間の自由というものをとても大事に考えていますが、決定論の立場にいるのになぜそういうことが言えるのか疑問でした。おそらくこのレベルで自由を考えているのでしょう。プロテスタントの言う自由もそういうものなのかもしれませんね。救われるかどうかはあらかじめ決まっているので、今日勤勉に働くことは自分が救われることとは何の関係もない。それでも自分は救われると信じて働いています。外から見れば「すでに決まっているのになぜ努力するのか」と思える。けれど彼らはここでの努力に違う価値を見出しているのでしょう。そういう意味で我々はジャンセニストの人生に感じるものがあります。彼らの行動を「気の迷いだ」と考えることもできるでしょうが、そうした考えには何の意味もないように思えますね。運命論的な考えと「私はそれをすべき」という考えのパラドックスに哲学を感じます。

S: 私にはジャンセニストの努力の価値がわかりません。増田さんの考えは、中島義道さんの『後悔と自責の哲学』と似ているのかなと思いました。「決定論を引き受ける」ということはいいです。でもその後の人生はどうなるのでしょうか。その都度、起こったことを受け止めるだけなら、非常に受身な姿勢であり「世界に働きかける」という自由はそこにはないように思えます。ならば、「自分の人生を良くしようとする努力」にも価値などないのではないのでしょうか。

H: 確かに「引き受ける」ということだけでは駄目でしょうね。「それをすべきだ」という考えがないと努力はできません。どうでもいいと思うならそれまでですから、理念は必要だと思います。ただ理念だけでも駄目でしょう。そうすると全てが「自分が選択した物語」ということになってしまい、リベラリストが批判される所以になります。理念を共有しない人はどうなるのかという問題や、自己選択の根拠は何なのかという問題が出てきますから。自己決定の選択とサンデル的な選択とありますが、やはり理念を引き受けることが真の自由だという気がしますね。「運命を受け入れる」というのも、「なるようになれ」ということではありません。どうしようもなく苦しい運命を引き受けるということは、理念を手放さないということです。辛かったら「そうすべきだ」という理念など手放したって良いわけですから。そうすると、選択も自分勝手にやるということではないですね。選択に意味があるとするなら、責任は何らかの理想や理念に基づいています。そう考えないと責任は生じません。